

あとがき

教育ツールとしての「ポートフォリオ」という用語を初めて耳にしたのは平成 15 年であった。運用に関する数多の困難もあったが、平成 16 年度に開始してからすでに 5 年間を経過している。本学のポートフォリオ運用開始に至る経緯については、本報告書に掲載した付録 5「同志社大学文学部 FD 研修会講演録」をご覧頂きたい。教育界であまり耳にしなかったポートフォリオは、いまや各大学において「e ポートフォリオ」の多様な活用が始まり、「e ポートフォリオ研究会」も発足しているほどである。

本学では、本報告書で紹介した「KIT ポートフォリオシステム」で運用されているもの以外に、数理工教育センターでの学習指導概要を担当した教員が登録する「学生指導カルテ（現、学習支援記録書）」、「工学設計Ⅲ」の学生の活動記録とそれに対する指導教員のコメントという双方向性の機能をもつ「工学設計Ⅲ活動支援システム」、また学生・保護者との面談記録を教職員が協働で登録する「修学履歴情報システム」などがある。さらに平成 21 年度からは、科目担当教員が学期終了時に授業を自己点検し、教育点検評価部委員会が確認する「授業点検シート」、つまり近い将来の「ティーチングポートフォリオ」の運用が決定している。

このようにポートフォリオは、主として学生個人の学習成果物の保存や学習達成度を確認するためのツールと理解されがちだが、そのほかにも修学生活指導、教員自身の授業運営改善に関する「ティーチングポートフォリオ」など多様な活用方法がある。今後科目や様々な課外活動での「e ポートフォリオ」利用増加が予想されたため、今一度システムの整備を必要とする時期を迎えていると感じている。

本学で運用している「修学ポートフォリオ」の目的は、その内容から見て、本来ならば大学に入学するまでに身に付けておくべき能力の体得にあることは言を俟たない。平成 19 年 4 月、文部科学省で行われた「ポートフォリオ勉強会」において本学のシステムを説明した際、文部科学省側からシステムの汎用性の可否を質問された。これに対して、「大学での運用はその大学教員サイドの理解と実践力に尽きる。しかしこのポートフォリオプログラムは大学よりも、むしろ初等・中等教育の中でこそ有効性があり、その運用は紙媒体を用いてもそう難しいことではない。」と答えたことを記憶しているし、いまでもその考えは変わらない。

つまり、初等・中等教育課程の学年別に相応しい記述（入力）項目を設定し、児童・生徒が毎日をどのように考え過ごしているか、これを彼らの目線で理解し支援することこそ肝要なのである。また初等教育段階から始めることによって、国語作文教育とは違った意味での自己表現力育成にもつながるのではなからうか。学校内ではクラス担任教員が担当し、家庭においては保護者が受け持ち、保護者・教員が連携して支援・指導を行う体制を構築することも考慮すべきではあるまいか。これが最近問題となっている家庭と学校との間の不信感を払拭し、相互の信頼関係を醸成する方策の一つになるかもしれないし、将来の日本を担うこども達への教育の第一歩であるように思えてならない。

本プログラム構築と運用に際して、多くの教職員各位のご尽力を頂いている。本学ではじめ

てポートフォリオそのものを紹介した山岸徹氏（金沢高等専門学校事務局長）、「1週間の行動履歴」の名付け親である久保猛志教授（教育点検評価部長）、様々な要求に対して常に耳を傾けシステムの構築と改良およびポートフォリオ入力マニュアル作成に尽力された河合儀昌氏（情報処理サービスセンターシステム部長）と舘純恵氏（同技師）、プログラムの発案・申請・採択後の事務処理およびプログラムの理解が遅い小生に懇切な説明を重ねられた村井好博氏（企画調整部長）、川邊宏氏（学務部次長）、本田尋識氏（教育支援機構学習支援部）、そして「修学基礎ⅠⅡⅢ」「進路ガイド基礎」「工学設計ⅠⅡⅢ」の担当教員各位、修学アドバイザー各位に対して甚深の謝意を申し上げるとともに、これまで以上のご理解とご尽力をお願いしたい。

また本プログラムは、「KIT ポートフォリオシステム」についての本学学生と教職員の理解と実践がなければ、現在進行形ではあるものの到底成しうるものではなかった。無駄と感じる学生にはその有効性を説き、登録された「修学ポートフォリオ」「達成度評価ポートフォリオ」に対してコメントや個人面談などでフィードバックを送り続ける教員にとっては相当な負荷があるはずである。しかしその結果、学生と教員との距離が一段と縮まり、相談できる My Teacher の存在を確認した学生も少なくないし、学生生活や将来の目標を持ち得た学生も多い。

様々な課題は残されてはいるものの、ここに今日までの成果報告を作成し、大方のご批正を仰ぐ次第である。

最後に、本報告書の執筆分担者を記しておく。

はじめに、第1章、第4章、第5章、付録4、付録5、おわりに

藤本元啓（本プログラム推進責任者、教授、学生部長、修学基礎教育課程主任）

第2章 宮本紀男（教授、元進路部長）、加藤聰（教授、前進路部長）

第3章 松石正克（教授、実技教育部長）

付録1、付録2

村井好博（本プログラム事務主担当者、企画調整部長）

川邊 宏（本プログラム事務副担当者、学務部次長）

本田尋識（本プログラム申請書画像作成担当者、教育支援機構学習支援部）

付録3 河合儀昌（情報処理サービスセンターシステム部長）、舘純恵（同技師）

なお本報告書の完成は、川邊宏氏の精力的な作業の成果であり、厚く御礼を申し上げたい。

平成21年2月11日

平成18年度採択特色ある大学教育支援プログラム

「学ぶ意欲を引き出すための教育実践—KIT ポートフォリオシステムを活用した目標づくり—」

プログラム推進責任者 藤本 元啓